

新陰流兵法に学ぶ

新陰流兵法転会 宗主 師範 渡辺 忠成

【新陰流の心法メンタルマネジメントとは何か】

本日は「新陰流兵法に学ぶ」というたいへん難しいタイトルをいただきまして、ちょっと困惑しています。特にこの「新陰流の心法メンタルマネジメントとは何か」わかったら私もお尋ねしたい。そういうくらい難しいお話になると思います。

この新陰流の心法というのは、江戸時代にはある程度、武士の教育として完成された時期もあったように私は思っておりますが、武士がいなくなった段階で、そういうものの崩壊したと考えられます。

ですから今は新たに、我々新陰流のみではなく、武術関係一般の方と共に、現代に通用する心法の完成を急がなければならないのではないかと考えているところです。

ちょっと内容が難しいものですから、いろいろと新陰流のお話を歴史とか技のこととか、そういったものをお話しながら、その中で考えてみたいと思っています。

ご存じのように、新陰流は「上泉伊勢守」を流祖とする流儀でございます。一般に小説とか武道関係の本では愛洲移香齋、これを陰流の祖として上泉伊勢守が二代目であるとか、これは疋田陰流の方達が江戸時代中期になってそういっています。

また、直心影流関係の方は「松本備前守」が流祖であって、上泉伊勢守は二世であると、こういうことも言っていますけれど、どちらも柳生家に対する区別と、後世になってそういうことを言い出したことであって、新陰流については上泉伊勢守がご自分で書き表しています。これは柳生家に伝えた伝書、またはタイ捨流・丸目蔵人に与えた目録にも、ちゃんと自分が諸流を学んだ後、特に陰流の中から「転（まろばし）」という極意を抽出して、新しい陰流、新陰流を起こしたのだと書いています。

特に上泉伊勢守を新陰流の二代目とする人に欠けていること、それは、上泉伊勢守が日本の武道、武術史上初めて禅の用語を取り入れたこと、そのことを考えれば、神道系の流派にそういうものが伝わっているの、上泉が二世というのはおかしいと思います。

陰という字なのですが、疋田陰流の系統の人達は、中国から陰の流れというものが伝わって、それが宮崎の鶴戸権現に秘伝書があって、それを愛洲移香齋が参籠した中で、極めつくして陰流を復元したというような話もあるようですけれど、これはちょっとおかしいと思います。中国から伝わったものを復元するとか、そういったものは、いくら伝書があっても起こらないのではないかと考えております。

それよりも、陰流の「陰」とは何か。今まで、日の入らない、日の映らない、日が差さないところ、見えないところ、真暗なところと、そういうふうに解説されていますけれど、これは心法と刀法の間に隙間がない、別々ではないんだということで、愛洲移香齋は「陰」と付けたのだと思います。

それとなぜ上泉伊勢守がこの「陰」という字を気に入ったかということ、新しい陰の「陰」なんです、上泉伊勢守は子供の時から、座禅、それから小笠原流、いわゆる「孫子の兵法」ですね。その日本の相伝者とされています。禅と武術、これを一致させたといえますか、禅の用語を持って自分の新陰流をいろいろ解説した、また表現したという点では、日本で初めての人あります。その前に孫子の兵法、これが、小笠原流の軍学、軍法、軍配となって一体化している。いろいろな本にはこのことについては一切触れられていないのですよ。それが、新陰流を理解するときに絶対に必要な条件になります。

孫子の兵法の中に、みなさん、よくご存じだと思いますけれど、歌にもなっています、武田節の「風林火山」があります。風林火山のところは、みなさん、よく知っているのですが「この言葉の後に続く言葉は？」と聞きますと、ほとんどの人が知らないですね。「知りがたきこと陰のごとく、動くこと雷神のごとく」動かざることというのは歌の中に山のごとく動かないとありますけれど、それに対して動くときは、雷様がピカッと光るように、目を覆うことができないぐらい早いのだと、それから、「知りがたきこと」というのは、人の心ですよ。戦争であれば相手の情報が完全にわかりませんから、相手にそういったものを知らさないということが大事になってきますね。そのために、知ることには情熱を燃やすわけです。そこでは「わからない」ということが正しいのでしょうか、まず、人の心は窺い知

れないものだと、では、知る方法がないのか、これが「兵法」であるということになってくると思います。

新陰流という名称がいろいろ変ってしまったということは、これは江戸時代、柳生家が新陰流ということで有名になってしまったものですから、他者は自分なりに流名を変えたりしていますけれど、流祖上泉伊勢守の弟子は誰も自分では（他の流名を）名乗っていないですね。ダイ捨流だけは丸目蔵人がダイ捨流と言っていますが、他の弟子は「新陰流」で通しています。それが今、あまりにも柳生が有名になってしまったものですから、柳生の新陰流、疋田の新陰流と分けたわけですが、むしろ第三者の方が、柳生の新陰流ということで「柳生新陰流」といったことが、正式名称のごとく一般に名乗られて、今では正式名称の「新陰流」を名乗っているのは、我々のグループだけです。他の方々はみんな柳生新陰流といっています。

では、柳生新陰流といえどどうなのかというと、江戸柳生が有名になりました。最近になって尾張柳生に刀法がしっかり伝わっているということで、見直されていますけれど、江戸時代に有名だったのは、あくまで江戸柳生家の新陰流だったわけですね。

江戸柳生の新陰流の場合は、流祖上泉伊勢守、それから石舟斎、その使い方を変革していませんので、これらは新陰流といっていると思います。

ただし、狭い意味で、柳生新陰流というものがあるとすれば（名乗っている方がかなりありますけれど）尾張の柳生兵庫助ですね。津本陽という作家が何巻もの本を連載して出しましたけれど、尾張柳生家は、初代兵庫助が、上泉伊勢守、それから石舟斎の使い方を全面的に批判して使った位、その当時の鎧・兜を脱いだ刀法に切り替えたとき、古い理論、古い使い方を全面的に批判して、これをお蔵にしまったわけです。自分の使い方が最高だというふうにしていますので、狭い意味では、尾張柳生の兵庫助以降の使い方を「柳生新陰流」といってよろしいかと思います。

しかし、私は子供のころですね、先代の柳生厳長先生という方がおられたのですが、いろんな会で、先生に「柳生新陰流では？」と質問すればですね、遠くにいればいいんですけど、近くにいれば「ごちん」とですね、「柳生新陰流とは存在しないんだ」と。先代の柳生当主はそう言ってですね、新陰流であるといっておられました。

まあ流名はそれくらいにして、江戸時代に石舟斎、宗矩とそれから宗冬と江戸柳生はここまで。十兵衛も含めてですね、伝わって、たいへん多くの人達を養成して、門下を各藩に派遣しています。これは、いろいろな本でみなさんもご存じだと思います。

尾張の方は尾張藩を出ないで、たった一つ高須（高須松平家：四谷家）の尾張藩の分家ですね。それから犬山城の成瀬家へは師範を送っていますが、その他へは送っていません。

それで新陰流の場合、尾張柳生家の場合は「柳生新陰流」と狭くいった場合あてはまるでしょうといいましたのは、鎧・兜を着ない「つつ立った位」、まあ「自然の位」といいますか、使い方をそう切り替えたために、技が完全にちがってしまっています。そのために、上泉伊勢守、それから石舟斎当時の使い方は、もう「裏技」としてほとんどの人には教習されなくなったわけですね。まあ一部の人達のみだけに伝えたということです。

新陰流の学習に入りますけれど、今、演武していただいたようなものは、少し後になってやります。その前に、本当の基本を作るためのベーシックといいますが、「取り上げ使い」というものを柳生連也が公案しまして、それで、その使い方を終わった後で、今みたいな使い方に入ります。これは小学校の課程といいますが、学問の世界でいえば、小学生ぐらいの課程ですけど、それを誰もが、その稽古をするようになったのは、私の時からです。それまでは、成人の場合はその「取り上げ使い」を省略していたために「取り上げ使い」を知らない人が昔は大勢いました。この「取り上げ使い」を知らないということは、やはり罪なんですね。永遠に知らないことは知らないわけですね。知っていて、それを大人であれば、子供が5年も6年もかかるものを3か月、半年でクリアすればいいわけですけど、知らないとすると、そんなものは嘘だとか、私が「取り上げ使い」を本にしていますが、そんなものは違うんだといってくる方もありまして、困っているわけです。知らない人から見れば、知っている人は嘘なんです。そんなことはおかしいわけです。

「取り上げ使い」これは何流の免許皆伝の方が来ようとも体験してもらいます。これは新陰流の一番大事な特徴でもある「身勢」といまして、身体の勢いと書きます。この身勢というのは、姿勢とは若

干違います。姿勢がいいとか、悪いとかじゃあないのですね。武器を持って戦うわけですから、この武器を持って戦えるだけの体、そういったものを作って行くわけですね。武器に振り回されてはいけませんので。

そういったものを、身勢ということで、基本を身につけてもらっています。この身勢の中で、特に強調されるのが「西江水（せいごうすい）」といいます。この西江水というのは、禅の悟りの言葉でもあるわけですが、我々は「丹田を引き締めていく」とこの西江水、身勢の中に「気」というものがおのずから出てくるわけですね。気をかもし出す、自然の中で、闘争の情というものを作り出すには、この西江水という丹田を引き締めることをまず身につけて、肩で気をおって行くということです。

気なんていくらやっても、出そうと思っても、なかなか出ないんですね。これは、雑ばくな気といいますか、にらみつけたりですね、そういう闘争中には、誰でも気は出ているんですけど、そういうものではなくて、本当の正気といいますか、精気といいますかね。正気というのは、この西江水という丹田を中心として、肩から出していく。気というのは、肉体と心が一体になったものだと思います。死んだ人は気が出ないんですね。生きている、そういう意味で、この正しい、生きているといっても結構だと思います。そういった気を作る、そういうベーシックを「取り上げ使い」でやります。

それから、取り上げ使いの中で、手の内、太刀の握りを勉強していくわけですが、だいたいそれがまあまあできていきますと「下から使い」という演武のような使い方に入っていきます。

「取り上げ使い」というのは1回1回止まって、ポイントとしてここは大事なんだよというところをチェックをしながら、型を使って技の基本を身につけるわけですが、次の段階では、実際に止まらずに、円の流れの中で、円転の中で太刀を使っていきます。では「円」って何か？

よく「円」というと丸いと思ってしまいうんですね。手で、刀の先で、円を描くのは、これは我々は円とはいいません。みんな間違ってますね、手でこう刀の先を丸くして円を描いていますけれど、そうじゃなくて「自分の体の中心軸、これが回転することによって、おのずから、剣先が円を描いていく」では、円を描くときにどうすればいいのか？という、これは一つの、まあ動きの極意なんですけれども、「どこを打てば勝てるのか、相手の動きのどこに隙があるのか」そこに目をつけて、その目付を斬るということですね。その目付を斬るために上げながら、自分の中心軸をそこへ向かっていく、結果、おのずから、円になります。

円といっても丸くないですね。楕円であったり、「し」という字がつぶれたものだったりですね。ただ直線ではないということで、円といっているだけです。ですから「転（まろばし）」という言葉がさっき出てきましたけれども、この転の最高の極意というのは、まあ一言ではいえませんが、自分の体の回転、それと太刀の円転がみごとに一致していくところに、まず動きとしての極意があります。

まあ、心法ということですが、なかなかそちらの話が出てこないですけど、もう少しこのような話をさせてください。

それで、燕飛、三学、九箇というような内伝、まあ内伝というのは尾張柳生家がつけた名前です。ですから、本来は本伝、または古伝といった方がよろしいと思うのですが、我々は便宜上、内伝とつけています。それで同じ三学、また九箇なんかでも、取り上げ使い、それから、兵庫助の本伝から改革した内伝、さらにそれが難しいというので、道機齋（厳春）という方が内伝のパート2を作ったわけですね。今、演武したのがパート2の方です。そういうふうにして、だいたい大きく分けて、同じ技でも4段階ぐらいに分かれています。いろんな使い方変わってきます。最後の使い方はさっきもいいたように「裏技」という形で今日では、一定のレベル以上の人でないと、稽古しておりません。

それと、刀法を学んでいながら、一定のレベルになりますと、市販されています、みなさんご存じの「兵法家伝書」とかですね。そういった書物に書いてあるようなことを、おのずから学習していきます。

兵法家伝書は一般的に流布されていますけれど、我々の場合は、伝書類があります。一番古い伝書としては、「新陰流兵法截合口伝書」これは、上泉伊勢守や、その師匠の愛洲移香齋とか、鹿島、香取の人の口伝とかを、石舟齋が自分なりに考えたものを編集したものです。これは柳生石舟齋編集といえます。

それから、柳生石舟齋一代の口伝書としては「没茲味手段口伝書」というものがあります。それと、柳生兵庫助が一代で「始終不捨書」というものを書いています。それと、連也が「連翁七箇条」というものを、尾張の方ではこの四つを「四代口伝書」といって、これは型の収伝をするにつれて、少しずつ

学習していきます。まあ江戸柳生関係では「兵法家伝書」「月ノ抄」とですね、十兵衛さんの、それとか沢庵の「不動智神妙録」とか「太阿記」とか、そういったどちらかといえば「心法」を中心としたものがありますけれど、尾張柳生の方ではどちらかといえば「技」そのものの口伝書が多いわけです。

そうかといっても、どちらも混じっています。重さが「心法」が多いか「刀法の技術的な技法面」の口伝書が多いかの違いがあるだけです。

というのは、いくら、凄そうな型や難しい崇高な言葉を聞いても、それはそれで頭で理解しても、武術の世界では意を成さないですね。技をやって、鍛練を通して、そういうものを理解していくということですから。技のないところに、稽古、鍛練のないところに心法はない。これが武術の世界ですね。

思想の世界ではありませんので、兵法の稽古の課程の中で、そういったいろいろな教を学んで、それを型で使いながら、自分の心の中で、納得して血肉にしていく。それが当流の修行であります。

「兵法家伝書」はあまりにも有名ですけど、剣と禅といいますか、これは沢庵なり宗矩がかなり有名ですけど、剣と禅を最初に結びつけたのは上泉伊勢守なんです。後で出ますけれど「活人刀」とかですね、「殺人刀」とか、これは上泉伊勢守自身が使っている用語なのです。その用語を上泉伊勢守の精神に近づこうとして、宗矩が相当、沢庵に修行していろいろ教を乞うていたと私は考えています。

活人剣、みなさんのパンフレットには「活人剣」「殺人剣」となっています。「殺人剣」というのは新陰流にはありません。これは一般的なものです。 「殺人刀」というのはあります。「殺人刀」はこれの大家といえば「宮本武蔵」ですね。相手をグッとカエルをにらむへびのように威圧して勝ってしまう。これが「殺人刀」ですね。

ところが「活人刀」というのは技ではありません。よく間違えられるのですが、これは「活人剣」という用語はですね、一般的には禅、仏教関係の用語だそうなのですが、本質的には医学の専門用語だそうですね。なぜ、医学で活人剣という言葉を使うかわかりませんが、そういうふうに使っています。我々の場合はですね。

技の方では「活人刀」といいます。これは「活」という字の解釈でいろいろ変わってきますね。今も売っていると思いますけれど、デール・カーネギーが著した「人を動かす」というビジネス書がありますが、あれと同じで活動写真の「活」で「人を動かす」「人を動かして勝つ」という刀法の意味で、「活人刀」といいます。この型は「奥義之太刀」に入っています。

「正伝新陰流」という本の遺影版ができてかなり売れているそうですが、その中で柳生巖長先生は「活人刀」は奥義之太刀の一つであると書いています。石舟斎が上泉伊勢守と勝負して負けた。3回戦って3回敗れた。その技は上泉伊勢守がこの「活人刀」という技を使ったので、負けたと書いてあります。私は上泉伊勢守は九箇の「和ト」を使ったのではないかなと思っております。これは相当難しいことですので、巖長先生の特有の創作ではないかという話もあります。しかし「活人刀」にしても「和ト」にしても、相手を動かして勝つ技術です。

では、相手を動かす。よく、みなさんはいいますね。隙を見せれば、相手が乗ってくる。そう思うんですね。ですから「待の剣」ともいいますね。「待」っても、まったく誰も「こちらがここと思うところ」を打ってはいけませんよね。ですから「待」のときは必ず闘争の常として「懸」があります。「懸」とは「かかる」ことですね。かかって、それに乗らせるといいますか、相手も斬られるのは嫌ですから、斬られないように打っていく。そういう殺気の「気」、闘争の「気」というものをこちらが出さないことには、ただ待っていただけでは、相手は打って来ないです。このことが、会社なり、教育関係、学校の先生なんかは応用できると思うんですね。

武術の世界で面白いところは、相手の間合いに入らなければ、勝つこともできないし、また負けることもないわけです。相手の間合いに入る、これは技の世界ですけど、その基礎になる気持ち「気」ですね。その「気」を出したことによって、相手が乗ってきたとき「待」になって勝つということ、これがさっきいきました「活人剣」で相手を動かすということになるわけです。ですから、絶対に相手に勝ちたかったら、それなりに自分なりの「気」を出して、相手を自分の好む方向へできるだけ誘い寄せることが絶対に大事なんですね。

現代社会ではコミュニケーションだ何だかんだといろいろ騒がれていますけれど、やはり自分の気持ち、自分の心、そういったものをぶつけなければ、相手から何も返ってこないですね。道を歩いていて、こちらが害がなければ、向こうも害なく通り過ぎますけれども、歩いていてケンカをふっかけられて、

ケガをするような人は、何かそこに「隙」があるというか、そういう顔をしているんでしょうけれどね。そういう弱みに付け込まれてはいけないですね。

武道の世界、武術の世界は、闘争のとき以外は、そういう「気」を出さないというか、穏やかにしていなさいというのが、上泉伊勢守や石舟斎の教えです。石舟斎の兵法百首に書いてあることは、技の教えもありますけれど、ほとんど、慎み深くしろ、自分の本能を隠せということです。ところが、現代社会ではちょっと難しいですね。自分の本能を隠していると、いつになってもその人は能無しと思われてしまいます。自己PRの時代だという今は、武術の世界とちょっと相反するところがあるので、たいへん苦しんでいるところです。

宗矩の逸話の中で、剣では負けてしまうけれど、馬上であれば、たとえ柳生宗矩といえども負けないという若者がいて、馬上ですね、剣で争わずに、(宗矩は)相手の乗っている馬の眉間を扇子でたたいて懲らしめたという話があります。これは「心の下づくり」といいますか、相手にも恥をかかさな、そういったことの配慮なんですね。そういうものも、新陰流ではすごく大事にしています。

また教える場合でも「人物を見て教えろ」と石舟斎は随分いっています。ただし、先ほどいいましたように、あまりにも隠して、隠してしまいますと無くなっちゃうんですね。新陰流もずいぶん「風前の灯」までいった時代がありました。

これは隠すことよりも、現代では教えて知ってもらえるようにする、そのことが大事じゃないかとつくづく思っています。隠して、隠す通すことよりも、どんどん教えて、教わってもですね、それはただ単に「知った」だけなんですね。知っただけでは武術は使えません。知ったことを鍛練していき、動きが十分に身についたとしてもまだダメなんですね。その動きが身につく、はじめて色々な先人達の教え、悟りというものの事柄と「自分の心」を照らし合わせて、それで足りないところをさらに稽古を積む。そうすることで本物に近づいていく。

流儀というものは、その流祖の心に返らないといけない。私もこの転会をつくった時にはですね。情報としては、先ほどいいましたように、その教育上カリキュラム上のもは全部知っていたんですけど、どれがいいのかということ色々考えた末に、やはり流祖に戻る。よく修行の中には「初心に返れ」という言葉がありますけれど、それは初心の時の純粹さに返れと一般にいわれています。そうじゃないんですね。一定の段階に来ますと、あれも知っている、これも知っているとなったとき、じゃあ自分の中心に置くものは何か。これは流祖に戻ることです。自分が尊敬できる流儀なら、流儀の先祖に戻ることでですね。そうした時にカリキュラムの場合はずっと積み重ねていきますけれど、今度は上から下への道のりがよく見えてきて、全体が理解でる。全体を理解できた時、初めて研究がはじまるわけですね。それまでは研究とはいいませんよね。本当の修行ですね。ただ、修行といっても、ただ数だけやればいっていいものではないんですね。よく鍛練は明日に千回、夕べに千回なんていいますが、本当に実践した人はそういうことはいけません。千回振るなんていったら、浪人して何もすることがなきゃあできるでしょうけれど、ただ数を振ればいわけではなく、一つひとつ心を込めて振って、その結果を自分でチェックして、さらにその次は今よりもっとよく自分の納得いく振りをする。そうすると素振り千回はとてもじゃないけれどできません。会社員ならそんなことをやっていますとクビになってしまいますね。

ですから、数じゃないんですね。自分の思いというか信念といいますか、そういったものを、たとえ10回でもいいです。5回でもいいです。それを込めなくてはいけないと思うんですね。それが無いものは、ただ体や筋肉を動かすことだけになると思います。

私はあまり話が上手ではないというか、講演の経験も少ないいんですから、話しがあっちいたり、こっちいたり跳んでしまって、申し訳ないですけど、じゃあ柳生石舟斎が徳川家康に会って、その結果、徳川家康がなぜ柳生家の技術を採用したのかという、徳川家康は先を読んでいたんですね。

自分は政権を絶対にとるぞという。その時に何が必要であるか。もう戦国乱世が終わって、泰平な世の中をつくるにあたって何が大事なものと。一つは学問ですね。学問といっても儒学を持って、政治哲学といいますか、そういった倫理をつくる。この政治哲学の確立は林家の儒学を持ってやったわけですけど、そうかといって学問だけでは足りないわけですね。大人は学問だけでは、やってられませんから。そういうことで柳生家の無刀取り、これを見たときにこれだと思ったわけですね。

柳生家の持っている無刀取りとはどんなものか。これはよく先達から聞かされたんですけど、太平洋戦争時にアメリカは原子爆弾を発明しました。これと同じぐらい戦国武将にとってはショックだったのではないのでしょうか。今まで一生懸命、槍や刀を持って戦っても拉致があがらなかったものが、刀を取ってしまう。取っていくという技そのものではなくて、その思想ですね。無刀の思想といいますか、これが平和につながる。荒くれ武士どもを納得させられるものがある。そういうことです。そういうことで、まず、徳川家康はこれだと思ったのではないかと。そういうふうに私も思います。

では、無刀取りというのは、後で少しまねごとをやりますけれど、いろいろ説があります。正式には「脱刀法」といいます。脱刀法とうのは宗矩が「兵法家伝書」に書いていますように、いろんな武器を使いこなすことだと。それで相手を制することであり、また、相手が取られまいとするのを、取らないのも無刀取りだと。そういうふうに一般的にはいいですけども、尾張柳生でもだいたい同じようなことをいっています。このことは普通の本には書いてありません。「取られまいとするのを取らないのも、取られまいとするのを強引に取ってしまうのも無刀の一つ」です。

これは、どうして「強引に取ってしまうのも無刀取りか？」といいますが、最初に取りようと思ったからには、目的を貫徹させる、そういうものがなければ、相手が取られまいとするのを取らないという平和的な考えと、取ってしまうという武術的な考え方と、重点の置き方によっては違いますけれど、両方必要だと思います。取られまいとするのを取らない、これも一つの平和な考え方かもしれませんが、どうしても取らなくてはいけないときは取ってしまう。これも絶対、意思を貫徹するという点では必要なことだと、私は思っています。

江戸時代の武士に対して柳生家のこの無刀という考え方、これは一種の平和思想ですけど、もう刀を抜いても仕方がない、刀を抜いて戦ってもさらに刀を取ってしまう、取られてしまう、そういう存在があるということを荒々しい武士どもに知らしめ、まず大人しくさせて、それから時代を背負う若者たちに精神的な教育、その思想や哲学を柳生家に求めたということが、柳生家が有名になった原因だと思います。そういう哲学的な思想がいろいろな流儀や武術、すべての武士道に合わさって良い影響を及ぼして江戸時代の三百年の泰平が築かれていったと思います。

この武術の鍛錬を通して、江戸時代の侍は自己研鑽を凶ったわけですけど、一番、武術の中で大事なことは勝つことなんです。単に相手に勝つ、誰かに勝つことだけではなくて、自分の「行動哲学」といったものを稽古を通して確立していった。その一端が「葉隠」でいうところの「武士道とは死ぬことと見つけたり」ということと同じになると思います。自分が行動するときの信念、行動哲学を日常生活の中で、江戸時代の侍は身につけていった。その最終的なものが「死を見つめる」ということだったと思います。

「命は鴻毛より軽し」といいますが、自分の命を本当に軽く考えた人は一人もいないと思います。自分の命は大事ですし、自分の家族、身内の命は大事なんです。そんな命の重さを知って、なおかつ責任とかそういうものに対して自分の命を投げ捨てるという哲学を高めていった。それはあくまで自分の信念を武術を通して高めていったと思っています。

私も口にしてしまう「武道」という言葉ですね。「武道」というのは教えられません。「武術」は教えられます。ですから「剣術」の場合でも私は「武」の中で特に「剣術」を中心にやっているわけですけど、「武道」というとちょっと考えてしまいます。教えられる、教習できるものは「技」であって、その「技」に付随する「心」はですね。どういう心根でその「技」を使うのかということは教習できます。それを乗り越えて、自分なりの信念、自分なりの悟り、そういうものが積み重なって大きな「悟り」が開けたとき、その人は「道を悟った」のだと思います。ですからそういった人以外は「武道」という言葉は使えないと思います。教習を乗り越えて、自分なりの信念、悟りが積み重なって大きな悟りを開いたとき、その人は道を悟ったんだと思います。ですから、そういった人以外は「武道家」とは言えないと思っています。あの人は武道家だというときには、その人はたいへんな悟りを得た立派な方であると使われるべきであると。駆け出しの人が俺は武道家だとか、武道をやっているとと言われると私は疑問を感じます。

今日のタイトルでもあるような「心法」という点では、私もまだ未熟です。悟りを開くところまでいっていません。偉そうなことは言えないのですが、45年もやっていますとね。最初は父親から稽古させられたわけです。その当時はまだ進駐軍がいますとね。戦後、まだ日本が独立できていない時代

ですから、一般には剣道や柔道は禁止させられた時代です。ですから一般の剣道家は田舎に疎開した。でも誰もやっていませんでした。「剣道ではなくて剣術なんだ」と庭で父にやらされるわけです。最初は自分がやらされているのが剣術とか、新陰流なんて全然知らなかったです。ただ父親だけは赤い袋竹刀を使い、昔はゲートルというものがありましたね。ゲートルを袋にしますと丁度、紐がうまい具合に縛れて、私はそれでやっていて、早く赤い袋竹刀でやりたいと思ったものです。

まあ小学生当時の父親は怖いですから、やらないと叱られます。一定の時間、約1時間程やれば開放されてどこにでも遊びに行ける。そんな形でやりだしました。上手か下手かという下手だったみたいです。

昭和33年に先代の柳生巖長先生が「正伝新陰流」という本を出してくれたお陰で、音信不通だった父親と連絡がとれて、東京柳生会というものができて、ポツポツ古い人も集まり出しました。

ところが高校生のころ上京し、会場でかなりのご年配の人の稽古を見てみると下手なんですね。自分も下手だと思っていたんですけど、もっと下手な人がいるわけです。やっていると分かってくるんですね。その時に巖長先生でも父親でも、本当のいいものだけを見ておけば、たとえその時は使えなくても、イメージとして最高なものが目に入るわけです。ですから悪いものは見てはいけません。高校生の頃、剣道部の試合や稽古を見ると叱られました。私より肉体的にも才能があった私の兄ですが、高校の授業で剣道をやったために私の父が見限りました。そのお陰で私が新陰流をやらざるを得ないような形で仕込まれたわけです。本当にいいものを、最高の動きを見続けるということは、修行の中で大事になってくるわけですね。芸術関係でも鑑定官にさせるとか、家業で美術的なものを扱っているところは、最初は最高なものしか見せない。数学の学者の「岡 潔さん」も話していますが「本当にいいものを見続けると、ただそのどこが良いのか悪いのかわかる」と。わからないものをわかるようにするためには、その人に会って話をする。理論を持っているかということですね。

長く一つのことをやっていれば、ある程度は動けるようになります。ただ、その動きがきっちりとした理論に適っていなければ、例え試合で強い、弱いという動きでも、正しいといえないと思います。

頭の良い人は次から次へと新しい理論を発表したりしますけれど、頭の良い人は、私のところにやっても、まだ教えているのに、半分も教えないうちに、もうわかったと。そういう人が多いですね。

修行というのは、やはり自分がついた師匠を乗り越えるまでは、追いつくまでは、素直に全部吸収するぞという心が大切ですね。

この間も「破門」についていろいろ話し、質問もされたのですが、上泉流祖も石舟斎も柳生宗矩にしても破門なんかやっていません。尾張柳生家になると柳生連也が弟子に逆破門されてね。弟子が行っちゃって、立派な流儀を作ったのでしょうか、そういうこともあったんです。

なかなか破門なんてできるものではないし、昔は今と違って許されるまで着いていった。師匠というものに着いたらもう教えることがないと、後は自分で研究しろと言われるまではその師のすべてを吸収する。このすべてというのは、技の知識と人格面もすべてですね。

行動のもとになる自分の信念、哲学という話をしましたけれど、面白いのは柳生十兵衛亡き後の江戸柳生家を継いだ宗冬ですね。この人は兄や父が偉かったものですから、なかなか自分で思うように得心がいかなかった。まあ「鷹」か「鳶」に比べたら本当に「雀」にも及ばないと思っていたとき、池を見たらボウフラが泳いでいる。ボウフラだって蚊になれば飛ぶんですよ。よし俺はボウフラでいいと。それから大成して一生懸命がんばって、一応、将軍家の師範を務めて、円熟して亡くなっていったわけですけど、宗冬という人は自分のことは表に出さずに、十兵衛兄貴はこう言った、父はこう言ったと随分、書き物を残したという点で、江戸柳生の伝書類は今日たくさん残っている。そういう功績を残した人なんですね。

「正伝新陰流」の中に出てくる、自分の師匠のことを悪く言うてはいけませんので、亡くなっていますからいいでしょうね。柳生連也と宗冬が戦って、連也が宗冬の親指を砕いたとありますが、こういうことは絶対有り得ることではないんですね。もし、あったとしたら将軍の目の前で、血を流すようなことは未熟で恥ずかしいことです。私が自分の立場で考えたら、もしあったとしても隠します。勝った負けたは二の次ですよ。

尾張と江戸の確執は兵庫助と宗矩の確執に始まると言われています。しかし家禄の違いで交際していませんから、いつの間にか他人同士になり、そうなっちゃったんでしょうけれど。

現実には、明治時代からコミュニケーション不足で、大正2年ですかね。柳生巖周先生と巖長先生が「宮内省の公営警視」と昔はいったところへ呼ばれて、師範として柳生出身の生徒を10人ほど教えました。大正10年には終わりになったのですが、8年間やった人でも公営警察での教習が終わったとたんみんな辞めているんです。残念ながら新陰流を続ける人はいなかったわけなんです。

その公営警察に尾張柳生の親子が宮内省に呼ばれたのは、江戸柳生の最後の当主（柳生俊益（やぎゅう・とします））が明治天皇のお付きの部下をやっている、明治天皇に頼んだんですね。それで尾張柳生が世に出るきっかけになったわけですが、こういうことが知らされていないので、江戸と尾張の確執が今日もたせられているという点では残念です。コミュニケーション不足なんですね。相手の立場を本当によくわかっていなければいけないのに、関わらず、新陰流の教えの中に「心の下づくり」「相手のことをよくわからなきゃいけない」「情報もきちんと得なければいけない」ということがあるのに、流儀の教えを忘れて、確執に走っちゃったんじゃないかなと思っています。

随分、宗矩の「兵法家伝書」や沢庵の「不動智神妙録」には難しいことがいっぱい書いてありますけれど、まあ、みなさんが読んでいただいて、私が話すことではないと思うのですが、まず修業、型、型に名前があるものとなないものがあります。先程、お見せしました「燕飛」や「九箇」とか「三学」には一本一本名前がついています。「試合型」にも名称がついているのですが、ただその動きを表したような哲学的な意味での型名と三学みたいにする「一刀両段」「斬釘截鉄」のような全部、禅の用語で名づけられている。そういうものは何故そういう名称がついたのか、これを考えながら稽古していくと、ある時ふとわかるんです。「一刀に両段して偏頗に任ず」なんていったってわかんないですよ。偏頗というのは偏ったということですから、偏ったほどいいということなのか、偏ってはいけないということなのかわかんないですけど、別名「拝み打ち」なんていいますけれどね。拝み打ちというと手は真ん中なんですね。いわゆる「人中路」と我々は言います。正中線なんて一般では言われますけれど、我々は人中路。この鼻の線を人中路と言うんですね。人中路を合わせる一つでも何年もかかります。

これは一瞬一瞬にして、ふと感じた時に、どこに太刀があろうと、見たところに体が回転して、剣が出せる。それが我々の「転の太刀」であるわけですが、ただ「転」というと、よく真つすぐ人中路を刃筋が通ることだと。それだけではないんですね。それは基本の一つなんですね。それであって高い山の上の岩石が千尋の谷底へ落ちるがごとく勢いがあると。そう孫子の兵法に書いてあります。また高いダムが崩壊して水が本流となって下界に溢れ出る。そういう勢が一瞬一瞬でなければ「転」とは言えないんですね。「転」は禅の用語であり、孫子の兵法であり、一体となっているものであるわけですね。たいへん「転」だけでも難しいです。それを平常心で出来る様にすることが稽古ですね。

稽古の中で最初は体しか動かしません。しかし、だんだんやっていると間合いも見切れるようになります。宮本武蔵の言う「観の目」なんてものは、まず最初は考えないことですね。まず、自分の目でしっかり見る。なかなかよく見えないものですが、よく見ながら型の教え通りにやっていると、相手の動きがよく見えてくるわけですね。剣先の2～3ミリのぶれですらよく見えるようになります。

「観の目」なんていって「心で見る」なんて、偉い人が最終的に道に到達したような、悟ったような言葉を鵜呑みにしちゃいますと現実から回避しちゃうわけですね。そうならないように稽古していく。

やはり体ですから、最初は体と太刀が一致しない。それを乗り切ろうとする。自分なりにさぼらず道を求めていく。それが新陰流であろうと、他の流派であろうと最初はそこから出発します。

いつもいのですが「稽古」なんですね。最初は体を動かす修行なんですけれど、単なる動きが自分の見えてきた「心の状態」と段々一致してきますと、それが「技」になる。「技」と自分の日々の人生を一体化するところに修行の「行」ですね。そこに入って行く。武術を稽古する人間は生涯現役でなければいけないと思っています。早く指導者になって威張ってしまったらもうお終いですね。

ただ、現役でもいろいろあるわけですね。コーチ兼選手の場合もあるし、本当の監督兼選手の場合もあるわけですね。ただし完全に兼業じゃないといけない。死ぬまでが修行なんです。わかったと思っててもですね。動いてみたらまだ理解していなかったり、そんなことがいっぱいあるわけですね。

新陰流の先達がですね。いろいろ理論や哲学を残してくれたものですから、それらを自分で吸収しながら稽古の中に活かしていく。そういう点ではすばらしいと思いますけれど、やらなければだめですね。

やって動いて自分の道を切り開いていく。師匠なんかはアドバイザーでしかないんですね。できるだけ自分の門人をダメにしようと思う師匠はいないと思うんですけど、中には自分が追い越されるのが嫌だから、ある程度以上になったら、ダメダメと言うだけで教えない。これは秘密だから目録になってからだとか、免許になるまで教えないとか、そういうことではないんですね。宗家だとか師範家だとかいろいろありますけれど、流祖クラスの人を一人残せばいいなんてことを本来は考えていなかったはずです。自分の技や哲学を知ってほしいという点では、百人でも千人でも仲間がほしいというのが本当だと思います。ただ「いいかげんな人格的に怪しい人には極意を与えない」ということであって、託せるだけの人物であれば、何百人でも自分の技を伝えることが喜びであって悲しみではないと思うんですね。

生活のためには収入とか面子とかの結びつきで、免許とか宗家とかいう制度は厳しくなっていますけれど、流祖の時代はそんなことはあまり厳しくないんですね。もっと大らかであったと思います。

武術を通して道を悟ると言っても、どういう道なのか本当にわからないですね。私も漠然としています。最終的には人間としての道ですから、師範と弟子の間には「信頼関係」。それから先程、言いましたように、相手の中に入っていかなければ勝負もない。合気道をやる人は「合気」と言いますね。これは打太刀、使太刀が本当に気が合った時じゃないと本当の演武はできないんですね。気が合っている、自分が打太刀の立場であれ、使太刀の立場であれ、相手を本当に評価する、正しく尊敬できるという心が自分でわかってきます。その時が武術の稽古をやっている一番の楽しみですね。

会社などで上司から厳しく言われる。厳しく言われる間は花なんですね。何も言われなくなったらもうおしまいです。武術の世界でもそうです。だんだんレベルが上がっていくと、いままで良いと言っていたことがダメになることがある。そうすると思いのない人は今まで俺に嘘を教えていたのかと辞めていきます。そうではないんですね。今までのレベルはクリアしたから、その次のレベルで稽古しましょう。ということなんですね。今までのレベルでどっぷり浸かっていたらいけない。次のレベルで稽古しましょう。ということなんですね。

そういう向上心といったものを指導する立場の人は与えるわけですけど、繰り返し、繰り返しやっても「奥儀」や「裏技」というものはなかなか教えてもらえない。

裏技というのは覚えるのは簡単なんですね。易しいんです。ただ、易しくて簡単で覚えられるけれど使えない。表技はある意味、鍛錬のための難しい動きになっています。それをちゃんとわかってですね、苦しいことは最初にやった方がいいんですね。最初から易しく覚えられたら修行心がなくなります。ではなくて、本当に大切なことは少しずつ練っていくこと。よく言われますが「極意は目の前にある」のだと。沢庵和尚が「太阿の利剣（たいあのりけん＝剣を持つ者が心を澄まし執着や恐怖に囚われない境地を説いたもの）」と書いていますけれど、稽古を通して目の前にある薄い曇ったガラスみたいなもの、鱗とでもいいますかね。それを一つずつ取り除いていく。そうするとある時にパッと見える。そういうことが「悟る」ということだと思います。

新陰流の場合、一番難しい心法はあまりお話しできないんですけど、自分の人生の中で「自分がどう喜びを持って死ぬところへ持っていけるか」というのが修行だと思います。今流行りの言葉で「ライフワーク」ですか。文部省は生涯教育なんていっていますけれどね。生涯教育なんて文部省が言う方が間違っているんですね。これは自分で設定して、自分で行っていくべき問題ですね。人に言われたからやるもんじゃないですね。自分で作る。そういう意味では新陰流もそのライフワークとしてすごく奥深いものです。先達たちの歴史的な事項や人格面、哲学面の研究。技そのもの。歴史的な他流との比較や変遷。そういったものがあります。それから武術と宗教との関係。行動様式、文化形態。そういったありとあらゆるものを考え出したら、博士論文がいくらかでも書けます。単なる文献としてではなく、一つ一つやっていくと、一人の人生では解決できないくらい多くのものが含まれています。これを文部省にいわれなくても、自分で目をつけてやり出している人が武術を習っているのだと思います。ですから習いだしたら最後、最高の得心といいますか、自分のこれだという悟りに到達するまで幅広く、最初は体の動きですけど、先達の精神面、教えといったものを稽古を通して、自分の肉体の中、頭の中へ咀嚼していく、これが大事だと思います。

そういった動きを見て、武術は一般的には「段」といいますが、最初の段はやっぱり技の世界なんですね。最終的には精神的なものになります。ですから新陰流でも「目録」になるちょっと前までは「技」が重要視されます。本来は人間性を見て「天狗抄」という位を伝授します。

現在は「目録」ぐらいですね。それ以上の位の伝授は人物本位になります。人物といっても好き嫌いではなく、やはりその人が修行を通して、何を悟って、現代社会の中で生活を送っているか、それが大事ですね。

いくら難しい本を読んでいてもですね、禅の高僧が負けるような難しい言葉を並べても、それが実行できないような生活を送っているとすれば、武術の世界であっても「免許」とかそういったものは出せないですね。

ちなみに新陰流の場合、尾張柳生系の場合是一般に「免許皆伝」といっている伝位のことを「内伝」と言っています。これは尾張柳生家の兵庫助の使い方を卒業した人が「内伝」になれます。「内伝」は宗家と分けているわけですが、ここまでじゃあダメなんですね。その裏技である「本伝」。これまできちんと修めなければ「皆伝者」とはいえない。そう私は自分なりに考えています。

宗矩の逸話で有名なのは「島原の乱」の時、禄高の低い「板倉重昌」という大名を幕府が派遣したときに、自ら馬を飛ばして呼び戻そうとしたが間に合わず、将軍の家光に注進したという話。結果は「板倉重昌」は討ち死にしちゃったわけですが、こういう「先見の目」とか一般にいわれる「判断力」とか「リーダーシップ」とかいったものは、まず第一に「自分の行動力」や「自分の判断」が基になる。「信念」ですね。それを稽古の中できちんとつかんでいく。これが基だと思います。それがなくてリーダーシップだのどうのこうのといったって無理なんですね。自分が揺れているのにリーダーシップを取ろうとしたって、今の政治家みたいなものですね。死に体になるわけですね。

自分を持つための稽古が武術だと思います。それで武術を通して自分の人生の中で、これが「道」というものを見つかるのがいいと思います。さっきも言いましたように生涯現役、これが一番大事だと思います。

武術の世界では「守破離」という言葉がありますが、我々は「守破離」は使いません。「習稽工」を使います。習は「絶えず新しいものを学ぶ」ということ。稽は「鍛錬すること」。これらを十分した後で、工「自分の個性を尊重した工夫活動」に入りなさいという教えですね。工夫していくと情報が足りなくなります。新しいことを学習すること、武術の研究であっても、いろんな諸芸、一般の学問、こういったものが必要になってきます。絶えず新しいことを学び、それを鍛錬して体に咀嚼させて、体や頭の中が滑らかになったところで、次の工夫をする。また工夫がある程度、行き詰まったら、新しい学問をする。湯川秀樹さんがノーベル物理学賞をもらいましたが、研究で困ったときに、専門外の生物の解剖学、細胞の構造を楽しみながら研究して、それが「中間子理論」を考えついたといわれています。

これと同じように我々も中心はあくまで武術の技法の習得ですけど、これを中心においていろいろなものを取り入れていく。取り入れていくというのは、それらの考え方、哲学を学ばばいいと思います。では全部やる。合気道から空手から剣道などですね。それを通した仲間といいますか、先輩といいますか、そういった人が修行の中で得たものを取り入れて、自分の稽古と一体化させることが「習稽工」といいですね。これを「三磨の位」といって三つの位を絶えず螺旋のごとく行う。ですから終わりはないですね。終わるといえるのは本当に辞めてしまったり、満足してあの世に行くときですね。

誰でも自分の命が一番大切なわけですね。けれど他人の痛みとか、他人のケガの痛みはなかなかわからない。棘一つ体に刺さっても痛いわけです。刀なんかで斬られたら想像しただけで大変ですよ。その痛みを感じる。これも武術家の最も大事なことだと思うんですね。痛みを感じない人は武術は稽古しない方がいいと思います。自分で受けたりして、技をかけられたときの痛み。これは肉体的な痛みだけではありませんね。何でもっと上達しないのかな？本当に情けなくなるな。こんな精神的な痛みもあるわけですね。それらを踏まえていけば、乱暴なことにはできずに、自分で問題を設定して、上達できると思います。

心法ということで、時間がないので最後にですね。私が一番いつも口ずさんでいる戒めの言葉があるんです。誰でもつい甘くなる。そういったときに「自分で律することができて初めて社会の中で平和に生きていける」わけですね。自分で律することができるようになるには、武術を研究し、学ぶ目的の一つであると思います。どうもありがとうございました。

【新陰流の技術について】

先程のメンタル的な部分は、私の得意ではない分野ですが、今度は具体的な「新陰流の技」について説明していきたいと思います。

新陰流の技術の系統は「柳生石舟斎」を経過したものが一般的にそういわれています。柳生系統の新陰流では「西江水」の教えと「無刀取り」ですね。これが際立って違いがあるわけですね。

タイ捨流とか疋田流とかにはこの用語がありません。ただし「転」というのは上泉伊勢守から伝わっていますので、用語や文字は違いますが「十字づめ」とか「十文字勝ち」それから「転」という字を間違えて「丸橋」なんて書いたものも。全部もとは「転」です。

これから柳生石舟斎の技術の中で特徴のある「無刀取り」についてお話していきたいと思いますが、その前に「西江水」についてお話しします。

昨年の暮れのTV番組や雑誌なんかで「西江水」という技が存在するかの如く間違えて話されたり、書かれたりしています。西江水という技はありません。西江水というのは体さばき、身勢、それらの基になる丹田のことをいうわけですね。この西江水が効いていなければ、あらゆる動きをしたときに体がどうしてもブレてしまいます。体が崩れれば、技、太刀、全部が狂ってしまいます。狂わせない、腰を安定させる、その極意の口伝が「西江水」といって、金春七郎、金春流の武田七郎に新陰流を石舟斎が教えた。その見返りに能の口伝である西江水を授かったわけです。この能の金春武田家というのは武道が大好きで、後に尾張藩では制剛流柔術の免許皆伝を受けて、先程、いろんな人のいろんなことを学ばなきゃいけないと言いましたけれど、能の家系でありながら随分、武術を研究している。そういう点では、金春武田家の方々は立派な方々だったのだらうと思います。

無刀取りというのは、正式な名称は「奪刀法」といいます。無刀取りの発案といいますが、技を完成させていたのは流祖、上泉伊勢守です。流祖、上泉伊勢守は石舟斎に会うまでに、すでに無刀取りを偶然かどうかわかりませんが行っています。石舟斎に会ったのは永禄6年ですか。今の群馬県、前橋の方から柳生へ行く途中、尾張の「妙興寺」というところで、無刀取りをしています。

上泉伊勢守の無刀取りについては逸話が二つあります。どちらが本当なのかわかりません。尾張柳生家では、妙興寺の境内で字を書いていた流祖が斬りつけられ、相手の刀の鑢を押さえ、無刀取りをした。それが一つ。妙興寺には上泉伊勢守の修行跡という碑も建っているそうです。

永禄6年にもう一つの話として、妙興寺の境内で、族が幼児を捕まえて立て籠もった。納屋に立て籠もったのを、上泉伊勢守が頭を丸めて僧侶に衣装を借りて、握り飯を持って行って安心させて捕え、幼児を助けた。どちらも永禄6年の妙興寺の境内でなんですね。どちらが本当かわかりませんがいい伝えとして柳生家に残っています。

永禄6年の翌年、7年に石舟斎に技として完成させろと言ひ、永禄8年か9年に完成した技を上泉伊勢守が見て、永禄9年に印可を石舟斎に渡しています。

この完成させた技法が「無刀取り」ですね。自分が武器を使わず素手で刀を取る。奪刀法の意味で無刀取りといっています。

石舟斎が上泉伊勢守に依頼されて、何によってこの無刀取りの技法を完成させたのかといいますが、石舟斎は良移心当流、福野七郎右衛門正勝ですか、この人のお弟子さんなんですね。良移心当流の柔の目録をもらっています。免許を得るその前ぐらいまでいっていたんでしょうね。ですから良移心当流の技術を剣の間合いに応用して、奪刀法を完成させたんです。

「剣」対「剣」の間合いと無刀取りの間合いは同じではありません。よく間違われるんですが、剣と同じ間合いでは取れません。ちょっと違うわけです。

新陰流の剣の間合いは、相手の肩や頭を斬らずに、先程、見てもらったのでわかりますように、相手が打ってきた小手を押さえます。小手を斬っているわけではないんですね。打ってきた小手を押さえて、本質的には突くなり刺すなり、それが「とどめ」になるわけです。

では、どの間合いかというと、相手の太刀が延びて自分の肩や頭が斬られる、その時しか取れません。それ以外の場合は取らずに外せばいい。後は様子を見て、間合いを詰めていく。これが柔（やわら）系統の間合いだと思います。

合気道の人がよく合気は剣から生じたとおっしゃいます。合気道の場合は柔道のように組み合わせることがないからですね。合気道の相手が打ってきた、その手を我が手刀でさばいていくあの間合いは、無刀取りの間合いとまったく同じだと思いますね。ですからそういう意味ではご縁があるんじゃないかなと思っています。大東流の基になっているのは柳生家伝来の剣のさばき、また良移心当流と関連があるんじゃないかなと思っています。私はそちらの研究はあまりしませんので、みなさんに教えていただきたいと思っています。

無刀取りというと有名な「真剣白刃取り」なんて言葉を作家などが使っちゃうものですから、みなさんは同じものだと思ってしまうんですね。これは絶対ありえません。こういう合理性のないものは新陰流の技ではありません。必ず誰でも修練すればできるというのが「技」です。誰でも稽古して修練すればできないものは「技」といわないほうがいいですね。たまたま天才がいて、その人だけが取れたというものは「技」ではないですね。

無刀取りというのは、先程いいましたように、刀がないときに槍でも小太刀でも鉄扇でも使いこなして相手の太刀を取る技のことです。いろんな伝書に諸道具を使って奪刀する方法は古くからあります。

新陰流には先程見てもらったように「外伝の試合型」や「内伝」の中に裏技として奪刀法がたくさんあります。普段の稽古でそれをやってしまうと型稽古が先に進まないで終わってしまうので、やらないだけなんですね。

これからそういったものを実践しながら説明して、後はみなさんからの質問に十分お答えできる時間をとりたいと思います。

【技を実践しての説明】

まず最初に「無刀取り」これは柳生石舟斎が作った「無刀勢」「手刀勢」「無手勢」という3つの技があります。

「無手勢」は合気道の技とまったく同じです。さらに柳生連也が無刀取りを考案します。これは「無手勢」がないだけですね。その後、長岡桃嶺先生という試合型を作った柳生家の補佐役の人が5本増補しています。それは雑誌なんかによく載っていますけれど、もとはみんな同じです。やって見せると合気道の人は同じだとよく言われます。合気道の技より新陰流の技の方がちょっと歴史が古いので、どっかに接点があるんじゃないのかなと思うんですけど。

無刀取りの前にまず身勢がしっかりしないと取れないです。身勢の稽古は初めるとすぐに入っています。ですから無刀取りに繋がった身勢づくりは入門時から始まっています。

無刀取りはいろんなものに最高極意だとありますが、最高極意ではありません。ですから私のところでは「目録」を出す前に伝授します。目録というのは免許皆伝よりずっと手前です。ただし使えるかどうかは別ですね。教わったものをできるように研究しなければいけないわけです。今から無刀取りじゃなくて、その前に無刀取りができるようになる型をやってみます。さっき八勢の中段、試合型はやりましたけれど、その中にあるものをやってみます。これは「相かけ返し」といってですね。さっきは相手のまっすぐな打ちを受けて返していましたがね。返すのは刀から返して、打つのは相手の手だけではないんです。相かけたときには足でもどこでも打っていいんです。手だとケガがないし、その後も技が続けられるから手を打っているわけです。相かけてぶつかったときに、この身勢だと取ってしまう。また取れなきゃいけないんですね。恐くて体が崩れたらと取れないですね。

初心者の間はそこまでできませんので、ワツと受けてですね。肩を回転させて打つことを練習させます。これは間違いではないんですね。本来的には相かけは全部取っちゃいます。

中段で頭を打ってくるのを西江水を効かせて相かける。押されても平気なんですね。体重が重い相手のつかってきてもですね、太刀を下げたら私が負けちゃいます。ですから相かけて右手で相手の太刀の柄をここまで上げると体重が乗ってこないんです。この段階で刺してしまうわけですね。これは表技です。

我々の場合は「小太刀」もありますけれど、表技だと小太刀でもこの技を練習します。こういう技で無刀取りの基礎を練習しているわけです。間合いをつかみ、体を使う。無刀取りの場合、小太刀でも同じことができます。

また、今と同じように相手が打ってきたとき、我々は小太刀の変わりに手刀を使うわけです。相手の太刀が当たる瞬間に逃げずに真下に入り、手刀で太刀を止め回転して太刀を取る。これが手刀勢です。

無刀勢というのは相手が遠くから打ってきたとき、左手で柄を押さえ回転して取ります。手首から先を使わず太刀を取る技を無手勢といい、合気道の技もまったく同じですね。ですから技自体はそんなに大げさなものではなく、むしろ内伝の太刀の方が私は使っていて難しいです。

小太刀や道具を使った奪刀法で一番古いのは、それはさつき木剣でやりました「燕飛」の中に、敵が刀棒で押さえてくるのを、表技だとはね切るところをブツかって勝つという裏技（隠し技）がある。これは新陰流では一番古い原点で、すでに上泉伊勢守流祖はやっているわけです。それを良移心当流の技術を理論化させて、誰でも取れるようにしたのが「無刀取り」です。

無刀取りの逸話に、大正年間に今の若松町の合気道の本部の近くにあった道場で、先代の柳生巖長先生が、先々代の柳生巖周先生が無刀取りやったのを1度だけ見たということがあったようです。

稽古をしているときに、巖周先生が相手の太刀を取り、その太刀を道場の端の方でしゃべっていた不心得者の顔に当てたという話が残っています。当てられた者は救急車で運ばれて亡くなったようですが、稽古中ですから殺人罪にはならない。そんな話があります。狙ったものなのか、偶然その人に当たったのかわかりませんが、巖長先生は「狙って取って投げた」と言っていたようですが、それができたとしたら名人、達人ですね。我々は太刀を飛ばすのが精一杯ですけど、別に飛ばすのが目的ではなく、すっと押さえるのが無刀取りです。

無刀取りは見た目は簡単に誰でもできそうなんですけれど、なかなか刀を振り上げた敵の間合いに入っていけないものです。入るために太刀や小太刀を使うとずっと易しく楽に入れます。

楽に何も考えずに飛び込んじゃえばいいんですよ。なぜ飛び込めるかというと、みんな太刀を見ちゃうんですね。見ちゃうと恐ろしくて入れないんです。それとなく入れれば大丈夫です。合気でいう「気を合わせる」ということですね。剣の間合いを徐々に練習していけば、軽く取れるようになります。

相手が打って来たとき我々の場合は手刀を使うわけなんです。小太刀のかわりにね。当たる瞬間に逃げずに真下へ入っていく。取った後、敵が太刀を離さない場合は組み敷いていきます。これが手刀勢です。無刀勢というのは、遠くから敵が打ってくるのを左手で取るのを無刀勢といいます。手を使わないとか、手首から先を使わないのは無手勢といって、合気道とまったく同じです。

間合いを見切る「目付け」というとよく「相手の目を見る」というでしょ。目を見るのは名人、達人だけで、「手を中心にして相手の全体像を見る」だけでいいんですね。刀の先なんか見ると恐くてね。刀の先は見ちゃだめですよ。ですから相手がどこから打ってくるか、その判断は手さえ見ればいいんですね。合気道の人が手刀で切っていくのと同じことです。ですから合気道の方もこういう袋竹刀を持ってやられるといいと思いますよ。こだわらない、恐れがないという（稽古ができる）ことから、袋竹刀は柔術関係の方に随分売れているらしく、我々が注文しても回って来ないんですね。木剣ではないですから、間違ってもケガはしないということで見直されているということですね。これは上泉伊勢守が考案した日本の竹刀の原形、原点ですね。無刀取りというよりも、無刀の考え方、それは恐がらないということです。石舟斎の最高の口伝書は「没茲味手段口伝書」というものですけど、それに書かれている極意とは何か？いくつもの条項がありますが、最高極意は「勇氣」であるということですね。

勇氣を出す。技術的には「間合い」とか「間積もり」「目付け」「相手の太刀筋」を読む。こういうことが完成しないとできないということです。

「無刀取り」は最高極意といいますけれど、私はもっと違うものが極意だと思っています。それは「転（まろばし）」ですね。何処からかかってこようが、瞬間にそこに向いたとき、自分の太刀が向かって勝つ。これはこちらが斬るにしても、相手が斬るにしても「峰」「谷」というものがあります。「峰」「谷」というのは「どこから、どこに斬るか」ということですね。昔は「肩かけて小手に斬る」「眉間にかけて手を斬る」そういう「上下」それから「逆」に。近くから相手が斬ってきた剣先を（自分の太刀で）割って入っていく。そういうことが「峰」「谷」なんです。「どこから、どこ」ということですね。ですから「上下」だけではありません。下から跳ね上げられる場合は「峰」が「下」になり、「谷」が上になりますね。「袈裟に斬り上げる」ようなときは「上」「下」は関係ありません。けれど「峰」「谷」といいます。

相手が自分を斬ろうとするときは、相手が形成する「峰」「谷」があります。相手が自分のどこからどこへ斬ってくるのか、その「刃筋」ですね。その「峰」「谷」の形成を瞬時に見破って「それに絶対に勝つ刃筋」があるわけです。それを勝つ方の「峰」「谷」というわけです。その「峰」「谷」を一瞬にして形成することが大事なんです。それができないと本当の意味での「転（まろばし）」が使えないわけです。自分が右の敵に向いているとき、次の敵が左から来たとき、右を向いたままだと斬れないわけです。

左から敵が来た瞬間、「人中路」とそれと「背骨の位置」がずっと向いて円転して勝つ。これは大体「180度」までいけます。首が向くところまではいくんです。「180度」以上はいけません。この「転（まろばし）」はこういう点で難しいです。ずっと向いた瞬間に勝つ。この体の回転と十分気持ちがそこに入る瞬間。そういうことが難しいです。

体術関係でも「多人数がかかってくる」というものがありますけれどね。我々も多人数に対応します。だいたい360度を3回ぐらい回ればいいんです。180度以上は限界がありますが、180度は鍛練すれば十分いけます。自由自在に相手がどこから来てどこへ打ってくるか見抜いて、見えた瞬間に勝つわけです。そのときは、相手の手や体を斬らなくてもいいわけです。いざとなれば相手の打ってくる太刀をたたき落とせばいいわけですから。融通を利かせればいい。相手が斬ってくるのを、絶対「小手」を斬らなくてはいけないとか「体」を斬らなくてはいけないとなると、自分自身に「制約」ができます。

自分が斬られなければいいわけですから、相手の刀の裏がとれないなら、たたき落とせばいいことですね。

私が思うに、相手が「峰・谷」の形が成されたときに、自分が形成した「峰・谷」で勝つ。太刀を上げた瞬間に勝つ筋に入っているわけです。それがキツかったら筋を移動すればいいわけです。ですから太刀を正しく上げることができれば99%ぐらいは勝っている。上げられないと勝てない。真っすぐだつて難しいのに「回転」しながらだと余計に難しいです。それができて、尚且つ、高い山から大きな岩を転がすような勢いがあること。これが「転（まろばし）」ですからね。これは「無刀取り」よりずっと難しいんです。

太刀を使うには、お腹を出したり、太刀を手首で円を描くように使うわけではありません。体の回転と同時に太刀を自然に使う。手は何もしないんです。振り回したらいけないんです。円を描いて相手が太刀を引き上げるとたたき落とせます。そうではなくて、相手は「峰・谷」は形成し、攻めてくると、小手をそのままで斬ることができることに、相手はいますから。それで勝つ。

「筋」というには中心を取って、体を正面に向けることです。相手の中心を斬って行くとき、どんなことがあっても我々は肩が左右にぶれることはありません。体を反っちゃあいけない。相手を押さえるときは骨盤と肩だけはどんなことがあっても水平です。使太刀（自分）が水平で、打太刀（相手）が打ってきたところを崩してしまう。使太刀（自分）が正しい（身勢だ）と打太刀（相手）が負けるわけですから、それを打太刀が認めることによって使太刀が伸びていく。

合気道でも本当に「受け」が上手でなければ、大先生が演武をやっても技が冴えない。合気道でいう「受け」が打太刀ですが、型の修練ですから表面上は使太刀に負けますが、心の中では全部勝っている状態でないと技が冴えない。勝っているのに負けるというのは難しいわけですね。相手（使太刀）に勝ったという喜び、「勝ち味」といいますけれど、勝ち味を打太刀が与えていくわけです。

打太刀は最初はある程度、負けるように打っていく。そのうち段々と厳密に打って行って、それでも相手（使太刀）が勝つようにしていく。削り節を削るように、少しずつその筋を厳密にしていくことが型の「稽古」なんです。ですから打太刀は負けながら相手（使太刀）の筋を見えています。こっちから来て、こっちに入ってというように。

それから「当たる角度」を読む。角度というのはものすごく大事で、その角度をまずきちんとつかむことが「身勢づくり」なんです。肩が左右にぶれたり、腰が立ったりせず、押さえる角度があるわけです。「右の肩」と「左の腰骨」が「ちょうつがい」で「心張棒」で「一体化」しないとダメなんです。それぞれの角度、峰、谷の形成によって勝つ。

刀は便利なもので、刃が一箇所しかないの、刃筋を外して「鑄」「平地」を打てば必ず相手を崩せるんです。ですから刃筋さへ見ればいいんです。「杖」や「棒」にも「杖筋」「棒筋」というのがあって、握っている直径の部分が最高に強いといわれています。ここを払ってもダメだといわれています。「釜槍」や「素槍」などの場合は若干違ってきますが、槍はただ真っすぐに伸びてくる。だから見えない。

上から振り上げて斬ってくるのはよく見えるんですけど、瞬間にふっと伸びてくるのは間合いが取れません。「突き」だけは注意しろとよくいいますけれど、現実にはあまり「真っすぐに突く」ということはありません。真っすぐに突いた場合、かわされるともうダメなんです。ですからさっき「九箇」でやりましたように、我々は「真っすぐ突く」というときは「気攻め」です。実際にはじわじわ押していく「気攻め」の突きなんですけれど、本当の「突き」は「突き倒す」相手をひっくり返すわけですね。相手がどちらにも逃げられない角度で攻めて、相手を突き倒してしまうのが目的です。ブスリと刺すわけではないわけですね。

こういう技を通して「身勢」をつくり、「間合い」「間積り」「拍子」それから「心の調子」。そういったものを学んでいく。あとさっき言いました「恐がらない」ということですね。「恐がる」ことは「病気」ですから、病気になったらダメなんです。

病気にさせないために、恐がらさないために「鳥飼い」という指導方法があります。正しく打てば、相手を負かすことができるかと教えるものです。学校でも「私が正しいのに先生は怒る」と思わせたら、その人は伸びずに止まってしまうわけですね。学校でも会社でも「正しく立派な行い」があったときには大いに褒める。悪いときには叱る。それが励行されなければいい生徒や社員は育たないことと同じだと思います。

では、できるだけ多くのみなさんのご質問にお答えしたいと思いますので、質疑応答の時間にします。

Q1 姿勢をつくるというか、体を鍛練していく場合、型の稽古の中でどう鍛練されているのですか？

A1 特別な鍛練法とうものはありません。流儀によっては「籠をしょったり」「人を肩に担いだり」することがあるようですが、私達はそういうことはしません。太刀の一振、一振の中で歩幅や形を考える。歩幅が狭ければ揺らぎますし、相手の背の高さによっても形は変わってきます。自分の標準、一番安定して力が出せる姿勢を形づくっていきます。「この形がいい」といわれたものを崩さないように腰や腹の位置など標準を型の中で作っていきます。「正面から打った場合はここ」「二のきりの場合はここがいいですよ」「こうなっちゃあいけません」そういうことを「身勢」というんですね。

「身勢」は「じっとしていても、何か迫って来られるような」そういうものがなければ、武術では「気が出ている」とは言わないわけですね。そういうものを、自らの鍛練を通してグッと出せる。気を出すことを醸し出す練習をいうわけです。ですから特別な単純動作は行いません。

Q2 間合いの取り方とタイミング。(相手の太刀を) 払ったところに入っていく。これはどういうところにポイントがありますか？ 剣と剣を持った場合、または無刀と剣の場合、それぞれ多少違いはあるかもしれませんが、適切な間合いを取ることが何か大事なような気がするのですが？

A2 間合いというのは「3つの間合い」があります。ところが世の中には間合いというのは4つあるような感じがします。「居合の時間的な間」は一人使いをやるとできる間ですね。じっとしてから、何秒か置いてそれから斬る。これは私たちは「間合い」とは言いません。

殺人刀ですよ。相手を威圧して動けなくしてバサッと斬る間合いというのは、単純な間合いで「自分の手と刀」の距離です。相手が武器を持っているときと、こちらが持たない場合、さっきの「無刀取り」のようなときですね。相手の伸びて来た手に自分の手刀が届く間合いですから、相手の武器が長かろうが、短かろうが関係ないですね。目付は必要ですけど。

剣対剣の間合いは、自分の剣の「物打ち」が、相手の打ってくる手を外しながら捕まえられる間合い。「相懸かりの間合い」といいます。この「相懸かりの間合い」が一番読みづらいわけです。

同じ間合いでも「触刃境(しょくじんきょう)」といまして剣先が触れるか触れないかというこの間合いが一番読みやすいものです。にらみ合っているうちに全部読めますから。動かない人を斬るのと同じです。相手がフワッと攻撃してきたとき、すっと外すとか捌(さば)くことがあります。間合いを読み切れれば、外したり捌く必要はありません。相手の呼吸とか間合いを確認するために、スッと外して見るということがあります。

タイミングはよく攀（つ）られてしまいます。相手が（太刀を）上げるとついこっちも上げてしまう。これがダメなんです。相手が上げて、こちらから斬る人はいないですから。相手がどこに上げたかということを見切って対応すればいいんです。それを拍子といいます。

上げる速さですがブーンと上げてそっと下ろしてくる人はいないです。本能的にだいたい同じ速さで打ってくる。ですから、それに「自分の心の調子を合わせる」んです。相手が速く打ってきたなと思えば外すなら外して打たせる、またそれに載（の）るのなら、相手が上げきったところへ入って行く。そういうのを拍子といいます。

拍子というのは3つあって、原点は「越す拍子」といい、外しちゃうわけ。相手が打ってきたところをそっと外し、相手が打ち疲ったところを斬る。これを越す拍子といいます。相手が打ってくる瞬間に自分も斬り込んでいくのを「当たる拍子」といいます。当たる拍子は「つき合う」ことです。相手の打ちに対して、こちらも一緒につき合ってやる。それからもう一つは「付ける拍子」これは相手が下ろしてきたのをスッと押さえこむ。このように拍子も3つあります。

相手がくるのをギリギリまで見ておいて、ちょこんと勝つ。これは「調子」といい「大」と「小」とあります。拍子や調子がいろいろな形で合わさりますので、別々に説明しなきゃわからなくなりますね。型を教える場合は「これはこの拍子で使う」「こういう調子で使う」ということを設定して教えますので、稽古する中で身につくようにやっています。同じ型でも拍子を変えてやる場合もあります。型の中で「刀法理論」というものが全て学べるようになっています。

Q3 名古屋の方にも「新陰流」がありあすが、「転会」との違いは？

A3 名古屋だけではなく東京でもやっている会派があります。先代の柳生厳長先生が昭和33年頃に「柳生会」というものを作りまして、戦時中、大勢の門弟が亡くなってしまってますね。残ったお年寄りの門弟を集めて再開したわけですけど、そこでは「教習」というよりは「継承活動」「PR」をして「政界」「学会」あたりからいろいろな人を呼んで「支援」をお願いした。そういう形の再開だったようです。

その後、場所を借りて少しずつ稽古を始めた。私も高校生の頃から参加していました。厳長先生が昭和42年に亡くなったのですが、その年に私の父親と何とか（新陰流を）残さないといけなと思っていました。この段階では「名古屋で後を継げる人間はいない」と東京の会員ではそういわれていたわけです。それで私は「転会」を作って弘流活動に入りました。ある意味「同門」です。基は同じです。

柳生会のご自分の大先祖である「柳生兵庫助」の教えを一番、重要視してやっていると思います。私はこれまで説明してきたように、いろいろ考えたとき、納得できないところもありましたので、「上泉伊勢之守」「柳生石舟斎」の理論的な面や思想的な面を中心において、兵庫助以降の柳生家代々が改革した使い方もこれはこれで保存する形を取りました。大変なんです、本当はどれか一つ絞ったほうが易しくて楽なんですけれど、すべての段階を伝えていこうとやっています。

本当は10年やるなら一つの使い方をやるほうが完成度は上がるわけですが、柳生家代々の人達の考え、行動様式の区分、そういったものを現実に継承していかなくては行けないと、私も柳生家から教わった人間ですから、この方法を実行しています。柳生会と転会の交流はありません。

私も参加した東京の本拠地が中野の国立体育館だったのですが、NHKの大河ドラマ「春の坂道」以降、大勢の人が集まって、今の先生（延春さん）もそろそろ定年で「新陰流」の活動をしていきたいということもあってですね、大半の人を残して、私達（父子）は別の活動をすることになりました。一緒にやっていませんが、基は同じです。

Q4 威圧をかけられて身動きができなくなったときに、それを躲（かわ）す技は？

A4 一番、難しい質問です。だいたい威圧されたらお終いでしょ。ですから威圧されないことですね。ということは「遠い間合い」でいればいいわけです。威圧されそうになったら逃げればいい。

目の前で威圧されたときは、俗な例えですけど「死ぬ気でぶつかる」しかないでしょうね。

そこに「相打ち」というような教えが生きてくるのだと思います。私達は「相打ちは負け」だと言いますけれど、黙って殺されよりは命をかけて「殺されても相手の指でも足一本にでも食らいついてやるぞ」という「闘争心」が大切です。

威圧されるというときは、多くの場合「相手の目」を見ているという場合です。そういう時は「間の外で目を逸らせばいい」間の中に入ってしまえばそれもできませんから。相手の手を見たりすると気持ちが少し和らぎます。ですから威圧さないように「まず逃げる」「目を見ない」「相手の全体像や手を見る」それでも相手が襲ってきたら、命がけで、相打ち覚悟で引くしかないでしょうね。

Q5 「視線をきる」ということはできないものでしょうか？

A5 やっぱり相手の目に捕らわれてしまうんですね。目のすわった人がいますね。そんな人に睨まれたなら目をずらせばいい。人間にも「闘争の情」がありますから、恐いんだけども負けまいとする。そうするとつい目を離せなくなる。相手をカボチャと思えとかよく言いますが、そういうことではなくて、視線をずらすとか、一番いいのは「手を見る」ことだと思います。相手の手が動かなければ、攻撃には来ないですからね。

Q6 先程の質問との関連ですが、名古屋の流派というのは、今日、見せていただいた裏技などは伝わっていないということでしょうか？

A6 伝わっていないのではなくて、教習の中で練習はしていないみたいだということです。裏技といいますか、昔は表技だった「本伝」「古伝」は昔の教えのため「不味い」「悪い」ということで、尾張柳生の開祖の「兵庫助」がお蔵入りにしてしまったわけです。一般の門弟には教習しないと。補佐役や宗家の者が大事に守ってきたものは、レベルがそこまで到達しないと教えてもらえないということあって、無くなってしまったわけではないんですね。こういう教えが残ったわけですが、そこまで到達する人がいなかったということもあります。

兵庫助が作った「つつ立つた身の位」が表技となり、甲冑剣法じゃない使い方を標準にしていますから、なかなかそこからだと体術的には未分化の段階なんですね。

「つつ立つた身の位」というのは、甲冑剣法の「沈なる身」に対する体位です。お尻が膝（ひざ）より落ちたら「沈なる身」なんですよ。「それより楽に立ちましょう」というのが「つつ立つた身の位」ですが、つつ立つてしまうとダメなんですよ。それをすると体術的に「捌（さば）き」ができなくなる。決して隠したとかいうことではなく、兵庫助の理論や教えを学び、その教えがある程度できるレベルになってから「本伝」「古伝」はやらせないとただけで、すべてを誰もが教わるというものでもないんですが、「昔はこういう教えがあります」と一定のレベルになった者には、今でも教えていると思います。

Q7 「新陰流入門」のVTRを拝見したら、基礎の方の位に「大転」「小転」「天狗抄」「奥義之太刀」というものがあると理解しましたが、大転の位、小転の位というものは新陰流の「絵目録」にはないですよね？

A7 絵目録が書かれた時代には「大転」も「小転」も「天狗抄」という伝位はありませんでした。上泉伊勢守が石舟斎や宝蔵院に出会った頃の伝位というのは「目録」と「皆伝」しかありません。当時は人物を見て、「九箇」までは教えるけれど「天狗抄」の秘太刀は教えませんというように、「人を見て教える内容を決めなさい」という教えがありましたので、人物として合格をもらった人が天狗抄の秘太刀を教習され、その人の伝位は「天狗抄」となったわけです。

天狗抄の太刀数「構え八つ」と書いてありますが、八本目は「天狗抄奥」に該当する技なんです。そこから「多敵の位」が伝授され、「天狗抄奥」になるように、後世には「秘太刀の伝授」に合わせて「伝位」というものが決められていきました。江戸時代の柳生連也の頃からです。

「大転」という勢法を連也が晩年に作ったので、その段階で「大転」という伝位ができたわけです。将軍家光の晩年の御前稽古で、江戸柳生の「宗冬」が尾張柳生の「連也」に長い太刀で指を打たれたという逸話がありますが、当時は「大転」という太刀がなかった上での出来事です。

当時「大転」という伝位は、6歳から8歳から稽古をはじめた者が12歳ぐらいで与えられました。その次の「小転」の伝位は元服した教習者に与えられました。教習課程も内容も昔と今とでは若干変わっています。小転が初段とするなら、大転は今でいえば1級か2級ぐらいです。厳密ではありませんが、その程度であると思っただけであればよろしいかと思います。

Q8 「絵目録」の中で「二十七箇条截合」というのはどの段階で入っているのですか？

A8 二十七箇というのはそういうものではなく、上泉伊勢守が習得した「陰流」「新当流」といったものの中から「技」、我々は「勝口」と言いますが。相手がこう来た時には、こういう形の技で勝つという、そういった技を27、といっても本当は19なんですけれど、いろいろな流儀から「序」「破」「急」の太刀数3×9本、合計27本抽出したものです。それを基にして「九箇」と「燕飛」は別にして「三学」とか作り上げていったわけです。この27本の中には上泉伊勢守がイメージして作った型の中に入らなかったものもありました。先程見せた「捉へ引挺グ勢（とらえひきもぐせい）」がそうです。後は型の中に全部入っています。「三学」など稽古していくと重複したものが出てきます。同じ勝ち口だからです。そういっても一方は裏技のようなものが原点だったりしますので伝わったものは稽古します。

二十七箇というのは本当は「特別なもので教習しなくてもいい」ということになっていますが、私のところでは体験し研究してもらっています。というのは二十七箇をしっかりとやらないと「本伝」柳生家の裏技ですね。それが身につかないというか、わからなくなるんですね。そういうことで、今日でも「二十七箇」は教習しています。

Q9 「八箇必勝」で目録になるのですか？

A9 それは違います。八箇必勝を習うと「皆伝」の位になります。ですから「奥義之太刀」は目録以上になってから教習されます。そういう先人の教えが残っています。よく雑誌には「奥義之太刀」まで習うと「目録」だと書かれているものもありますが、柳生家の教習課程では目録を出さないうちは「奥義之太刀」を教習してはいけないことになっています。

Q10 新陰流入門のVTRの中で「追加」というふうに書いてあるものがありました。例えば「天狗抄」の奥義に「無刀取り」追加というふうに。追加の意味は？

A10 入門書に書いてあるものですね。「無刀取り」の追加は先程言いましたように、連也が3本追加したものと、桃嶺先生が5本追加したものがあります。応用技を追加したというだけです。入門書にはそんなに詳しくは書いていません。「教習課程で徐々にそういうものも段階に応じて学習していきますよ」というだけのことです。

Q11 相手の攻撃を回転で押さえていくテクニックのポイントは？

A11 ポイントは指導者でも知らないというか難しいんですね。体術でもそうですけれど、足の中に相手を置くことがポイントです。相手がすっと来たときに、相手を懐の中に入れるようにすっと回転します。こちらから動いてはダメですが、太刀を振る場合はこちらが先（太刀が先）に動きます。

足の内側の延長に相手が完全に入り込んでいる。そこがポイントといえポイントですね。その足さばきがなかなかできませんが、これができるば、そんなに難しいことではありません。

Q12 重心の置き方は？

A12 重心は「中華鍋」を思い浮かべてください。骨盤と骨盤を結んで、お臍（へそ）の下の「鼠径部（そけいぶ）＝足のつけ根（お腹と太ももの間）」が中華鍋と同じです。ここから重心が飛び出たらダメです。グッと落としたときにはここに置きます。膝（ひざ）や足で重心を支えるときは、ここから飛び出さないように動けば問題はないわけです。相手に崩されることもありませんし、滑ったり転んだりすることはありません。

足の裏で使うところは「土踏まず」です。「土踏まず」は字のごとく「踏まないところ」ですが、そこに「足の裏全体の中心」を置けば安定するんですね。ですから足のつま先や踵（かかと）に重心を置くのは良くないです。足の裏全体で土踏まずがクッションになりますから一番安定します。

そこに重心を置きながら、膝（ひざ）で調節して、重心が動かないようにすることがコツですね。

Q13 柳生心眼流の本の中に技術的なことで「左太刀」という文書があるのですが

A13 「左太刀」が一般的にあるのは「九箇」の1本目ですね。あとは「天狗抄」の乱剣。これは右太刀から左太刀に切り替えて斬る技ですけれど。それと「奥義之太刀」の1本目にあります。ですから、左に持つ技は昔からあります。

Q14 他の流派にも「左太刀」はあるのでしょうか？

A14 他流でもあります。「結城ノシン齋マサカツ」という人は塚原ト伝のお弟子さんですが、その人が得意な太刀としていたものですから、本来は新陰流ではなくて新当流です。

左太刀というのは、今なら違和感を持つかも知れませんが、昔は左太刀の人が多かったようです。右利きの人に有利とかではなくて、「右利き」という決まりは無かったわけです。「捷徑」の構えも左手が前に構えます。昔は半数の人が左利きだったそうですから、そんなことは気にしない方がいいですね。

【まとめ】

最初の「心法」の説明は取りとめがなく申し訳なかったですが、実践している立場でとして「刀法」のほうが得意です。今日は時間の関係で「無刀取り」を中心としたちょっとしたお話しができませんでした。また機会がありましたら、質問に出たような内容を加味してお話をさせていただくことがあればと思います。今日、せっかく来られたんですから、何か一つでも私がお話したことの中からお役に立つものがあればいいなと思います。

また今後も、個人的にでもご質問をいただければ、できる範囲で、できるだけお答えしていきたいと思っております。本当に今日はありがとうございました。